

TOPICS

金融機関担当者の能力に左右されにくい 融資相談の進め方

最近、金融機関の担当者に対して、「話がかみ合わない」「以前なら通じていた話を、何度も説明し直す必要がある」と感じる経営者が増えています。その結果、融資相談が進みにくくなる場面も見られます。ただし、やり取りがしづらくなっても、中小企業にとって資金が必要な状況は変わりません。重要なのは担当者の力量に期待するのではなく、担当者の能力に左右されにくい形で融資相談を進める準備を整えることです。

1. 融資相談がスムーズにいかない理由

経験の浅い担当者の場合、経営者から聞き取った情報を整理し、社内で判断に使える稟議書の形にまとめるまでに時間がかかることがあります。その結果、本部審査に必要な背景や前提が十分に伝わらず、本来は問題のない融資案件でも、話が前に進まないケースが見られます。このような場合、融資相談がスムーズにいかない原因は条件ではなく、判断しやすい形で情報が整理されていないことにあります。

2. 担当者の能力に左右されにくくするための考え方

このような状況を踏まえると、融資相談を担当者の理解力に依存しない進め方を意識することが重要になります。金融機関の担当者は経営者の代わりに事業計画書を作ったり、不足している情報を補完してくれる立場ではありません。あくまで提示された情報をもとに判断を行う役割にあります。そのため、融資相談では「分かってもらおう」ことを目的にするのではなく、そのまま社内の判断に使える材料を渡すという意識で臨むことが重要になります。

3. 担当者の理解力に依存しないための具体的な進め方

融資相談では、判断に必要な情報を最初にまとめて提示することが重要になります。そのため、次の三点を整理しておく必要があります。

① いくら資金が必要なのか

まず、必要な金額を明確にします。「念のため多めに」「足りなくなったら追加で」といった伝え方ではなく、なぜその金額が必要なのかを含めて示すことがポイントです。

② その資金を何に使うのか

次に、資金の使い道を具体的に整理します。設備投資なのか、運転資金なのか、借換なのか。可能であれば、「いつ・どこに・どのように使われる資金なのか」が分かる形にしておく、判断材料として伝わりやすくなります。

③ どこから返済するのか

最後に、返済の原資を明確にします。売上の増加なのか、既存事業からのキャッシュフローなのか。返済の道筋が整理されていれば、担当者は融資後の姿をイメージしやすくなります。

この三点が最初に整理されていれば、融資相談は「説明を重ねる場」ではなく、判断を前に進める場になります。

<発行・ご相談・お問い合わせ>

経営革新等認定支援機関

株式会社アシスト

姫路市飾磨区上野田2-1 田中ビル2F

<https://assistclub.pro/>

info@assistclub.pro

